

[特集I]

企画展 運河で生きる

～ 都市を支えた横浜の“河川運河”～

[特集II]

現地調査報告

能登半島地震と文化財

— 失われた銭湯経営者の寄進物 —

[展示余話]

続・能登半島と横浜

— 銭湯経営者の系譜 —



ご自由に
お持ちください

ハマ発 NEWSLETTER 第41号 2025(令和7)年1月18日発行(年2回発行・不定期)
編集/横浜都市発展記念館 発行/公益財団法人横浜都市ふるさと歴史財団 〒221-0021 横浜市中区日本大通12 TEL.045(663)2424 FAX.045(663)2453
題字/ロゴ/高橋健介 本誌からの無断転載を禁止します。

EXHIBITION

特別展のご案内



大岡川河口に係留した船で炊事をする女性
1960(昭和35)年5月6日
広瀬始親氏撮影・寄贈 横浜開港資料館蔵

運河で生きる

～ 都市を支えた横浜の“河川運河”～

開港後、横浜が都市として成長していくなかで整備・開削された「河川運河」は、絵葉書や写真の題材となりました。そこには、河川を行き交う様々な船、岸で荷物の揚げ降ろしを行う人びと、河川沿いに軒を連ねる商店などを見ることができます。現在も市民の憩いの場となっている「河川運河」は、横浜の経済を支える動脈でした。

企画展「運河で生きる」では、横浜、東京、千葉に残る資料から、都市横浜の経済を支えた「河川運河」の景観の変化と、そこで生きた人びとの歴史を紐解きます。

【会期】2025(令和7)年1月18日(土)～4月13日(日)

【収録】『運河で生きる ～都市を支えた横浜の“河川運河”～』
横浜都市発展記念館/編 定価1,800円

企画展関連事業

I. 展示解説

調査研究員が企画展の見どころを解説します。
日時 1/25(土), 2/1(土), 2/15(土), 3/1(土), 3/15(土), 4/12(土), 4/13(日)
※いずれも14:00から40分程度
※3/15は開館祭のため、11:00からも行います。
会場 横浜都市発展記念館 企画展示室
参加費 無料(企画展観覧券が必要です)
事前申込不要 当日直接会場にお越しください。

II. 連続講座

「資料から読み解く 都市を支えた横浜の“河川運河”」

文献資料や統計資料から運河の歴史を読み解きます。
日時 ①2/2(日), ②2/16(日), ③3/2(日), ④3/16(日)
14:00～15:30(受付は13:30～)
会場 横浜市開港記念会館
①は1号室、②～④は6号室
定員 先着100名 参加費 各回500円
※有料のアーカイブ配信も行います。
(購入方法など詳細は追って当館HPでお知らせします)

III. 「ボートでゆく運河散策」

調査研究員とともに
帷子川水系をボートに乗って散策し、
河口から横浜港を眺めます!
日時 3/8(土) 15:00～16:30
(受付は14:45～)
集合場所 南幸橋付近 参加費 3,500円
定員 36名 申込締切 2/26(水)
※雨天中止。途中で下船はできません。
浮き桟橋を利用する際、垂直の梯子を上り下りします。予めご了承ください。

II,IIIの申込方法

横浜都市発展記念館イベント申し込みページよりお申込みください。
(右のQRコードまたは、<https://teket.jp/g/3h8cn02vru>)

お申し込みはこちらから



MUSEUM SHOP

ミュージアム・ショップより

刊行物

『関東大震災100年 関東大震災と横浜 廃墟から復興まで』^①

横浜都市発展記念館・横浜開港資料館/編 定価2,200円

『横浜鉄道クロニクル 発祥の地の150年』^②

横浜都市発展記念館/編 定価1,540円

『激震、鉄道を襲う！—関東大震災と横浜の交通網』^③

横浜都市発展記念館/編 定価1,320円



横浜都市発展記念館 利用案内

■開館時間

午前9時30分～午後5時(券売は閉館30分前まで)

■休館日

毎週月曜日・年末年始ほか
(月曜日が祝日の場合は開館、翌平日に休館します。)

■観覧料

上記企画展開催期間

一般800円/小・中学生、および市内在住65歳以上の方400円

それ以外の期間 常設展のみ

一般200円/小・中学生、および市内在住65歳以上の方100円

※毎週土曜日は高校生以下無料

※「障害者手帳」「愛の手帳(療育手帳)」などをお持ちの方は、無料です。

※毎週第2水曜日「濱ともデー」は市内在住65歳以上無料

■ホームページ

<http://www.tohatsu.city.yokohama.jp/>

※本誌は当館ホームページでも
ご覧いただけます。



交通アクセス

- 東急東横・みなとみらい線日本大通り駅(3番出口)0分
- 横浜市営地下鉄ブルーライン関内駅(1番出口)から徒歩約10分
- J R 京浜東北・根岸線関内駅(南口)から徒歩約10分
- 横浜市営バス・神奈中バス「日本大通り駅県庁前」下車徒歩1分

●表紙図版

派大岡川でのボート遊び
奥村泰宏氏撮影・栗林阿裕子氏寄贈
当館蔵



編集後記

今回開催する企画展「運河で生きる」を担当する松本和樹調査研究員は、2022年に当館へ就任した気鋭の若手研究者です。本展は長期にわたり横浜における港湾労働者の研究を蓄積してきた松本さんの調査研究成果が遺憾なく発揮された展示となっております。関連事業も充実しておりますので、皆様のご参加をいただければ幸いです。(西)

◎次号発行予定 2025年7月頃



企画展 運河で生きる

都市を支えた横浜の「河川運河」



① 派大岡川でのボート遊び 奥村泰宏氏撮影・栗林阿裕子氏寄贈 当館蔵

静かな流れの河川でボートを漕ぐ男女。この穏やかな風景は、戦後直後の横浜で撮影された【1】。川の名前は派大岡川。横浜公園の裏を流れていたこの川は絵葉書の題材にもなった【2】。横浜の市街地には、派大岡川のほかに開削・整備された「河川運河」が網の目のように走っていた。「運河で生きる」都市を支えた横浜の「河川運河」では、横浜を流れる河川運河の景観の変化や、そこで生きた人びとの歴史を、横浜や東京、千葉に残る資料から紐解いていく。本稿では【1】で撮影された派大岡川を中心に、展示の内容を紹介する。

③は昭和29（1954）年9月13日に撮影された。この日の夜、台風12号の関東接近に備えて、河川輸送や港湾輸送に従事した船は河川や船溜まりに退避した。③は、船が派大岡川に退避した様子を撮影したものである。注目したいのは川に避難した船の多さである。港湾施設が接取された戦後の横浜港では、船が荷役の主力として活躍し、大岡川、中村川の河口や高島ふ頭周辺には多くの船が係留していた【4】。船には家族で生活する者も多く、子どもたちのなかには東京

や横浜の水上学校で寄宿生活を送る者もいた。展示では、水上学校が発行した校報に掲載された児童の作文から、船で暮らした人びとの様子を紹介する。

派大岡川は、河川沿いに問屋や卸屋、回漕店が軒を連ねる舟運の拠点でもあった。港町には市場が設けられ、野菜や魚介類の取引が行われた【5】。河川沿いには河岸と呼ばれる物揚場のほか、汽船の発着場も置かれた。「横須賀通出船所」は、横浜・横須賀間を結んだ貞喜丸の発着場である。派大岡川や派大岡川と合流する堀川、中村川は、三浦半島や房総半島と横浜を結ぶ航路の拠点となり、多くの汽船が行き来した。展示では、横浜と富津を結んだ定期船明治丸の関係資料を紹介する。

横浜の河川運河網は関東大震災で甚大な被害を受けた。河川運河は、国や横浜市による復興事業が進められ、派大岡川も市の事業によって整備された。⑥は復興工事後の派大岡川を撮影したものである。画面手前の橋は羽衣橋で、左側には昭和5（1930）年10月1日に新築開店した松屋呉服店横浜支店が見える。注目したいのは護岸である。復興工事によ



② 派大川付近「改正横浜市全図」 明治31(1898)年 横浜開港資料館蔵

は筆者加工

り、派大岡川の護岸は裏込めにコンクリートを利用した間知石の練積護岸となった。物揚場も整備され、画面右側、川に向かってスロープ状に下っている物揚場には昇降用の階段が設けられた。震災復興後に整備された護岸は、今日も堀割川や、石崎川、新田間川などで見られ、震災復興を伝える貴重な遺構となっている【7】。

1960年代以降、横浜市では大規模都市計画が構想され、河川運河は高速鉄道計画と高速道路網計画による開発の対象となっていく。昭和39（1964）年には、根岸線の開通で派大岡川上に関内



④ 派大岡川（護岸工事完成後） 昭和5(1930)年頃 当館蔵(佐藤殿旧蔵写真)



⑦ 新田間川の石積護岸 2024年2月9日 筆者撮影



⑤ 派大岡川を通る鉄道・道路交通網「(首都高速道路)事業概要図」 首都高速道路公団神奈川建設局発行 昭和54(1979)年 当館蔵



④ 大岡川河口に係留した船で炊事をする女性 昭和35(1960)年5月6日 広瀬始親氏撮影・寄贈 横浜開港資料館蔵



③ 台風で派大岡川に避難する船 昭和29(1954)年9月 五十嵐英壽氏撮影・寄贈 当館蔵



② 絵葉書「横浜港町川岸」 横浜開港資料館蔵

現地調査報告

能登半島地震と文化財

失われた銭湯経営者の寄進物

一、激震に襲われた能登半島

年明け間もない二〇二四（令和六）年一月一日午後四時一〇分、能登半島の先端を震源とするマグニチュード七・六の地震が発生、石川県輪島市や同羽咋郡志賀町で震度七を観測するなど、北陸地方は大きな揺れに襲われた。津波や土砂崩れ、大規模な火災等によって甚大な被害が生じただけでなく、関連死を含めておよそ四〇〇の人命が失われた。また、道路や水道の復旧に時間を要したほか、不自由な生活から生活の場を移す被災者も多く、奥能登を中心に人口の流出が進んでいる。地震によって能登の地は大きく傷ついた。

① 破壊された人麻呂社の石柱 2024(令和6)年3月 善端直氏提供



育委員会の善端直氏（文化財復旧保全対策室長）と面会、寄進物など文化財の被害について話をうかがった。その後、教育長の八崎和美氏、教育部長の松村和浩氏と面会し、能登半島と京浜地域との人のつながり、文化財保護の状況などについて情報交換を行った。興味深かったのは、①世代交代で都市移住者に関する記憶が急速に失われている点、また、②銭湯以外にも寿司屋に就職する人間が多かった点などである。双方の地域にとって、これらの記録化と情報収集が課題であると改めて認識した。善端氏の話では、七尾市瀬風地区に所在する人麻呂社の鳥居や狛犬、石柱などが崩壊したとい

③ 拝殿に掲げられた石鳥居寄付人の額 2024(令和6)年6月撮影



う。このうち鳥居は銀座「金春湯」の圓山清一郎、石柱は保土ヶ谷区天王町「富士竹湯」の竹中乙吉が寄進したもので、後者には「在横濱」の文字が刻まれている（吉田律人「北陸地方から横濱へ―銭湯経営者と同郷者集団―」、「開港のひろば」第一三九号、二〇一八年一月）。その後、七尾市から隣接する中能登町に移動、同町ふるさと創修館の船木秀浩氏、同学芸員の道下勝太氏と合流、町内の神社を車でまわった。道下氏の話によれば、発災後、町役場の職員のすべてが震災対応に追われたため、文化財の被害状況の確認はほとんどできなかったという。そのため、十分な調査ができないまま公費解体が先に進み、記録の保存はできなかった。人命の保護を最優先に考えれば、止むを得ないだろう。なお、船木氏の親戚は現在も横浜市内で銭湯を営んでいるそうである。

三、銭湯経営者の寄進物の被害

過去の調査で寄進物の存在が判明している神社を三人で一五ヶ所ほどまわり、目視で文化財の被害状況を確認した。被害の程度は大小様々だが、崩れたままの鳥居や灯籠、玉垣も多く、被災者の生活に余裕がない様子も散見できた。半年近く経過した時点でも、能登半島地震の被害の大きさが感じられた。

横浜関係の寄進物で大きな被害を受けていたのは、久江地区・久氏比古神社の石鳥居と尾崎・八幡社の石鳥居である。東京や横浜の銭湯経営者によって構成さ

年の企画展「銭湯と横濱」（横浜開港資料館・横浜市歴史博物館）の準備調査以降、石川県七尾市や同鹿島郡中能登町の学芸員とともに、京浜地域の銭湯経営者が残した寄進物の調査を進めてきた（吉田律人「能登半島に残る『横濱』」、「開港のひろば」第一四九号、二〇二〇年一〇月）。

この過程で約六三〇〇人分の銭湯経営者のデータベースを構築しただけでなく、中能登町を中心に、銭湯経営者の寄進物を整理した（京浜移住者研究会編『都市移住者を結節点とした地域間連携に関する基礎的研究―浴場経営者のデータベース構築を中心に―』公益財団法人横浜市ふるさと歴史財団、二〇二〇年）。一九二二（大正一一）年の関東大震災、一九四五（昭和二〇）年の空襲、さらに高度経済成長期以降の社会の急激な変化によって京浜地域の銭湯史に関する歴史資料は失われている。そうしたなかで、能登半島に残る寄進物は貴重な歴史資料、地域史を伝える文化財であったが、今回の地震で消滅したのも少なくないと推察できる。中能登町教育委員会と共に実際の被害状況を確認するため、筆者

② 久氏比古神社の鳥居跡 2024(令和6)年6月撮影



は現地へ足を運んだ。本稿ではその調査成果の一部を報告する。

二、被害の聞き取り調査

二〇二四年六月四日午前、中能登町の調査に先立ち、七尾市役所を訪問して企画展「銭湯と横濱」でお世話になった教

の狛犬は山森が寄進したものである。この狛犬に関しては、大きな被害は確認できなかった。

以上のような現地調査を通じて強く感じたのは、災害等の不可抗力によって歴史資料が失われることを前提に考え、金石文などの非文字資料もしっかり文字化、記録化していくことの重要性である。それを実現させていくには、日頃からのフィールドワークだけでなく、人的、物的、金銭的な資源が必要となる。少子高齢化が進むなか、能登半島で起きている問題は、今後、日本各地で生じるだろう。先人たちが残した歴史資料から過去をひも解くのはもちろん、地域の「記憶装置」として、今でしか残せない記録を千年、二千年先の人びとに伝えていくことも地域博物館及び学芸員の重要な仕事だと考える。

（吉田 律人）



④ 倒れた八幡社の石鳥居 2024(令和6)年6月撮影

余話展示

続・能登半島と横浜 — 銭湯経営者の系譜 —

一、石川県鹿島郡 中能登町曾祢

二〇二四（令和六）年七月二〇日、九月二九日まで開催したパネル展「能登半島と横浜―銭湯がつなぐ人びとの交流―」では、能登にゆかりのある横浜市内の銭湯を展示したほか、石川県の中能登地域（七尾市・鹿島郡中能登町など）に残る銭湯経営者の寄進物を紹介した。そうしたなか、会期中には、寄進者の子孫にあたる方も多く来場され、新たな歴史資料の発掘、情報等を得る場面もあった。特に中能登町曾祢（旧御祖村）にルーツを持つ東京都新宿区「大星湯」の前田哲也氏、同大田区「第一相模湯」の前田耕一氏からは曾祢出身の銭湯経営者の来歴、人間関係などについてご教示いただいた。これは銭湯経営者の人的ネットワークを解明する手がかりとなり得る。本稿ではその一部を紹介したい。

すでに横浜開港資料館の「開港のひろば」第一四九号で紹介したように、曾祢の奈鹿曾彦神社の狛犬や灯籠には、京浜地域の銭湯経営者の名前が刻まれている。その起源は判然としないが、昭和初期に横浜浴場組合連合会の会長を務めた



曾祢・奈鹿曾彦神社 2024年6月撮影

前田又五郎（横浜市中区長者町「東郷湯」）の存在が大きかったと推察できる。又五郎の来歴は越智剛二郎編「横浜市誌」（横浜市誌編纂所、一九二九年）に詳しい。一八八三（明治一六）年二月一三日、前田又次郎の次男として誕生した又五郎は、海外渡航をめざして一九歳で横浜に移住したが、松影町「谷川湯」の番頭となり、一九〇七年六月一日に独立開業する。一九二三年（大正一二）年九月一日の関東大震災では、風呂釜から出火し、店舗を失ったものの、再建に奔走し、昭和初期には複数の銭湯を経営するようになっていた。また、浴場組合の幹部として台頭し、最終的には全国組織である六大都市浴場組合連合会の会長に就任する。曾祢出身の若者たちは有力者である又五郎を頼って京浜地域に移住したと考えられる。

二、灯籠に刻まれた 銭湯経営者

一九二七（昭和二）年八月に建立された奈鹿曾彦神社の狛犬には、横浜市中区（現・西区）岡野町で「岡野湯」を営む前田良太郎、前田芳雄の名前が刻まれている。前田又五郎とは同じ集落出身であり、かつ同姓である点から親戚であろう。また、「紀元二千六百年記念」、すなわち一九四〇年に建立された灯籠には、良太郎以下、一六人の名前が刻ま

ている。東京市及び神奈川県鹿島郡の名簿を確認すると、そのうち一人が銭湯経営者であることが判明したほか、一九三一年の名簿には、東京市本所区緑町「小松湯」の経営者として「金西治左衛門」の名前がある。おそらく⑫の金西次左衛門の誤植だと考えられる。

加えて、⑩の前田勇助に関しては、一九二六年と翌二七年刊行の『帝国信用録』（帝国興信所）に横浜市中区不老町二丁目一五番地の「洗湯業」とあり、一九二九年の名簿を確認すると、そこには「菊の湯」（経営者は泉米次郎）があった。一九四〇年の時点で勇助は東京に移っていたと推察できる。このような都市間の人材の移動は⑬の金西佐右衛門でも確認できる。一九二九年段階で中区（現・西区）久保町「浜の湯」の経営者であった佐右衛門は一九四二年段階で横須賀市田浦「日の出湯」の経営者となっていた。こうした事例から同郷者のネットワークを通じた都市間の銭湯のつながりがうかがえる。

ここで重要なのが、情報がなかった⑬の前田照信の存在である。前田耕一氏の話によれば、照信は「第一相模湯」の先々代で、耕一氏の祖父にあたるという。また、前田哲也氏の祖父である重照は照信の兄にあたり、さらに前田竹應は重照・照信兄弟の従兄弟だという。寄進者のご子孫から情報提供を受けたこと

で、次第にその人間関係が明らかになってきた。

三、前田重照の生涯

灯籠に刻まれた人物情報をさらに深く知るため、会期中、筆者は新宿区「大星湯」を訪ねて前田哲也氏の母である照

子氏からお話を聞いた。「大星湯」の歴史は新宿浴場組合編・発行『新宿浴場組合の一五年の歩み』（二〇一〇年）に詳しいほか、初代・前田重照の来歴は世田谷区「宇田川湯」の山村幹子氏が東京浴場組合ホームページ「TOKYO銭湯物語（江東区「亀の湯」）」にまとめている。一九三五

（昭和一〇）年生まれの前田重照は今年で八九歳になるが、記憶が非常に鮮明で、文献には残っていない人間関係なども判明した。ここでは照子氏の父親である重照の生涯を中心に整理してみたい。

一八九五（明治二八）年、御祖村曾祢に生まれた重照は、親戚を頼って上京した後、横浜市の花咲町

「雪見館」で修業、大正期には神奈川県中郡平塚町で銭湯を経営していた。平塚には同郷の合田永右衛門もいたため、都市間の移動に関係していた可能性もある。なお、戦後、「雪見館」には、歌手として大成する三橋美智也が働いており、その当時の経営者は門勝二だった（三橋美智也「歌ひとすじに」サンデー映画社、一九五七年）。勝二は御祖村と隣接する久江村（現・中能登町久江）の出身者である。また、一九四二年段階の経営者は②の長田證道なので、「雪見館」は曾祢や久江と関係の深い銭湯だったと考えられる。

一九二九年段階で重照は東京府南葛飾郡亀戸町の「松葉湯」を経営しており、一九三六年には、宿谷太助の所有する深川区東扇橋町「東扇湯」の経営者となる。金融業など多角経営を行う太助は鹿島郡鳥屋村良川（現・中能登町良川）の出身者で、郷里の白比古神社に石垣を寄進するなど成功していた。重照と太助の関係は戦後も続くなど、太助は重照にとって後見人の一人だったと考えられる。その後、一九四四年に深川区猿江「亀の湯」を自らの所有とし、翌年三月一〇日の東京大空襲後は北埼玉郡羽生町で「羽生浴場」（旧「ドラック湯」）を営んだ。戦後は「亀の湯」を再建しつつ事業を拡大し、一九五五年四月には新宿区「大星湯」を取得していった。

重照の妻である君（旧姓岩田）は鹿島郡中島町（現・七尾市）の出身で、東京市日本橋区人形町「和泉湯」での勤務経験があった。また、婿養子として迎えた恒二（旧姓堂寺、哲也氏の父）は本所区亀沢町「山田湯」の経営者である堂寺恒次郎の孫であった。恒次郎は羽咋郡熊野村三明（現・志賀町）の出身者で、戦前は本所区区議員を務めていた。重照は婚姻を通じて能登出身者の地縁・血縁関係を強化させていったのである。一九七八年七月三〇日、重照は八三歳でこの世を去るが、曾祢に端を発する銭湯経営者の系譜は現在も脈々と続いている。今後、銭湯経営者たちの系譜について継続的な調査を行ってみたい。

（吉田 律人）

曾祢・奈鹿曾彦神社の石灯籠に刻まれた寄進者

灯籠（右側）					
番号	人名	所在地	銭湯	住所	出典
①	前田良太郎	横浜市	岡野湯	横浜市中区岡野町9	S12
②	長田證道	横浜市	松の湯	横浜市中区初音町	S4
③	金西佐右衛門	横浜市	浜の湯	横浜市中区久保町540	S4
④	合田永右衛門	横浜市	亀の湯	平塚市新宿1119	S12
⑤	石田孝二	横浜市	竹之湯	鶴見区市場町1781	S12
⑥	角屋栄吉	横浜市	第八六角湯	鶴見区潮田町188	S12
⑦	田地弥八郎	東京市	—	—	—
⑧	土地熊太郎	東京市	—	—	—

灯籠（左側）					
番号	人名	所在地	銭湯	住所	出典
⑨	三屋四郎三郎	東京市	宮の湯	東京市江戸川区逆井町2-532	S10
⑩	前田勇助	東京市	—	—	—
⑪	前田重照	東京市	松葉湯	東京市城東区亀戸町7-291	S10
⑫	金西次左衛門	東京市	—	—	—
⑬	前田竹應	東京市	春日湯	東京市城東区大島町6-593	S10
⑭	前田吉盛	東京市	鶴の湯	東京市荒川区尾久町5-753	S10
⑮	角屋興作	東京市	—	—	—
⑯	前田照信	東京市	—	—	—

※1. 京浜移住者研究会編『報告書 都市移住者を結節点とした地域間連携に関する基礎的研究―浴場経営者のデータベース構築を中心に―』（公益財団法人横浜市ふるさと歴史財団、2020年）より作成。

※2. 出典は下記の通りである。

S4=『昭和四年三月調査 六大都市府県下浴場名鑑』（浴場新聞社、1929年）

S10=『昭和十年二月現在 東京浴場名簿』（東京浴場組合、1935年）

S12=『昭和十二年二月現在調 神奈川県浴場組合連合会浴場名簿』（神奈川県浴場組合連合会、1937年）

前田哲也氏と前田照子氏 2024年9月撮影